

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02503

研究課題名（和文）インクルーシブ教育時代の多様なニーズのある学習集団における教育評価モデルの開発

研究課題名（英文）The Development of an Educational Assessment Model for Learning Groups with Diverse Needs in the Era of Inclusive Education

研究代表者

吉田 茂孝 (YOSHIDA, shigetaka)

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：60462074

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、インクルーシブ教育時代の多様なニーズのある子どもを含む学習集団での教育評価を究明するために、文献研究及び小学校や研究会などでの授業研究やフィールドワークから、日本・ドイツ・アメリカの授業、カリキュラム、評価の実践的な方法を手がかりに、その特徴と検討課題を明らかにした。そのうえで、「インクルーシブな学習集団づくりの評価指標（試案）」を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

インクルーシブ教育の時代においては、多様なニーズのある一人ひとりの子どもの学習の過程と成果を適切に評価する評価方法の多様化や、またそうした子どもの変化や成長を読みとる評価方法の開発は喫緊の課題である。そこで、本研究では、日本・ドイツ・アメリカの理論的な動向をふまえ、授業・カリキュラム・評価づくりにおける実践的な課題を明らかにするとともに、具体的な評価の指標を作成したことに意義を有している。

研究成果の概要（英文）：In order to investigate educational assessment for learning groups that include children with diverse needs in the era of inclusive education, this study clarified the characteristics and issues to be considered by analyzing the practical teaching methods, curriculum, and evaluation in Japan, Germany, and the United States. This analysis was based on literature research, classroom observations, and fieldwork conducted in elementary schools and research groups. The research team clarified the characteristics and issues to be considered. Based on this, we developed "A Tentative Draft of Evaluation Indicators for Building Inclusive Learning Groups".

研究分野：教育方法学

キーワード：インクルーシブ教育 学習集団 教育評価 授業 カリキュラム ドイツ

1. 研究開始当初の背景

日本では、文部科学省が2012年に行った「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」において、通常学級の中で「学習面又は行動面で著しい困難を示す」子どもは推定値6.5%にのぼると報告された。こうした発達障害のある子ども以外にも、被虐待児、トラブルや問題行動の絶えない子どもなどの特別なニーズのある子どもを含む学習集団に対する授業方法の検討は課題である。けれども、こんにち学校現場で実践されている授業には、ある一定枠の集団のなかでの「同質性」を前提にした画一的な指導も見られ、授業に参加できていない子どもも存在している。こうした子どもたちの多様なニーズに応答するためには、多様な学びが求められる。

ここで注意しなければならないことは、学習の過程や結果が学習者によって異なるという学習観は、学習者同士がつながっていない個々別々の個別化を意味してはいないということである。むしろ、学習者によって学習が異なるからこそ、学習集団において子ども同士のつながりのある学びの構想が重要である。こうした取り組みについてはドイツ・プレーメンでの実践分析から明らかにしてきた(平成28~30年度科学研究費補助金基盤研究(C)「インクルーシブ教育における学習集団の質的発展を目指した指導法とカリキュラムの開発」)。ドイツ・プレーメンでは、コンピテンシー志向の授業づくりとインクルーシブ教育との関係から、子どもたちが集団の中で学び合い、共通・共同する機会を取り入れた個別化を重視していた。それは、共通の目標や課題を設定することで、たとえ、一人ひとりにニーズがあり、学習の取り組みが多様になっても共に学ぶ場面が形成されていた(平成26~28年度科学研究費補助金基盤研究(B)「PISA後のドイツにおける学力向上政策と教育方法改革」)。こうした授業形態から、子どもたちの多様な学びと共同での学びにおいて必要な教育評価の新しいモデルが求められることを明らかにした(久田敏彦監修・ドイツ教授学研究会編『PISA後の教育をどうとらえるか - ドイツをとおしてみる -』八千代出版社、2013年)。日本でも、多様な学びが必要な特別なニーズのある子どもへの評価は課題であると指摘されている(西岡加名恵・石井英真・田中耕治編『新しい教育評価入門』有斐閣、2015年など)。こうした課題に対して、日本ではこれまで、「みんなでわかりあう授業の創造を目指す教育実践の目標概念」である学習集団づくりの教育実践が各地で展開されてきた。こんにちでは、一部の子どもに限定された学びがすべての子どもの学びへと展開する「学びの共同体」が試みられている。また、ドイツでも、個別指導ではなく多様な子どもが存在する学級やグループで学ぶ「異質なグループでの学び」や「協同学習」が注目されている。それゆえ、ドイツ教授学の検討やドイツでの調査を日本の学習集団研究と交差させながら明らかにしたい。

2. 研究の目的

本研究の目的は、インクルーシブ教育への注目により障害のある子どもだけではなく、特別なニーズのある子どもを含む通常学級で編成される学習集団での教育評価モデルを開発することである。多様なニーズのある子どもたちに対して、画一的な一斉授業だけでは授業の成立は困難である。ペアや班・グループといった小集団形態をはじめ個別指導も取り入れ、学習集団の仲間とつながっているという意識を大切にした取り出し指導など、多様な学びを構想する必要がある。それゆえ、多様なニーズのある一人ひとりの子どもの学習の過程と成果を適切に評価する評価方法の多様化や、またそうした子どもの変化や成長を読みとる評価方法の開発は喫緊の課題である。そこで、評価のあり方を問い直す必要がある。その際、どのような方法で自らの学習を評価するかを決める評価主体の形成も求められる。具体的には、日本の小学校などにおける特別なニーズのある子どもを含む学習集団での評価主体の形成の指導方法と評価方法を分析するとともに、海外のインクルーシブ教育において実践されている評価方法について調査・文献収集を行い、多様なニーズのある子どもたちを含む学習集団において必要な教育評価モデルを開発する。

3. 研究の方法

本研究では、目的を達成するために以下の3つの方法を実施した。

(1) 日本における学習集団論、カリキュラム論、教育評価論の文献研究(国内文献研究)

日本においてインクルーシブ教育について言及している学習集団論、カリキュラム論、教育評価論を中心に文献を収集し、評価主体の形成と教育評価の方法についての検討や教育内容と教育評価の関係についての検討をした。

(2) 日本の小学校、特別支援学級・学校等の授業分析(日本での調査研究)

授業改善に取り組んでいる大阪府、奈良県、香川県、広島県、福岡県、長崎県の小学校等の実践分析や教師が参加する研究会、サークルにおいても資料収集、意見交換を行った。

(3) ドイツのインクルーシブ教育の実際と課題に関する研究(ドイツ調査研究)

文献研究とともに、ドイツのザクセン州のライプツィヒ市において文献収集及び研究者・実践家との意見交換、フィールドワーク、授業観察等を行った。

4. 研究成果

本研究では、先行研究の整理やフィールドワーク・調査などからインクルーシブ教育における授業・カリキュラム・評価づくりの研究動向や実践的課題をはじめ、教育評価のモデルとなる評価の指標について以下の点を明らかにした。

(1) インクルーシブ教育における共通の学びを巡る実践的課題

日本とドイツのインクルーシブ教育をめぐる研究動向を見ることで、どちらも「統一と分化の原理」のもと、共通の学びを検討していた。ドイツのフォイザー(Feuser, G.)の場合は、「共通の対象」に沿って協同をつくり出しているところに特徴がある。とりわけ、フォイザーは、ヴィゴツキーの発達の最近接領域の考え方から、子どもの発達水準に応じた多様な学びをつくり出すカリキュラムを構想していた。その際、すべてを個別カリキュラムのように個々別々にするのではなく、「共通の対象」に沿った協同を構想することで、発達の促進の機会をすべての子どもたちにつくり出す授業を構想していたのである。このように、共通の学びは、協同を介してそれぞれの子どもの発達に大きく貢献するとともに、一人ひとりの個別化された目標に向かって方向付ける力にもなる。こうしたことから、インクルーシブ教育時代においては、実践的課題として、一人ひとりの子どものために、共通の学びを介した多様な達成のされ方が保障されるような授業、カリキュラム、さらには評価のあり方が論点となることが導き出された。

(2) ドイツにおけるインクルーシブカリキュラム・授業・評価の実践的課題

ドイツの代表的なインクルーシブ教育学者であるプレングル(Prenzel, A.)が構想するインクルーシブカリキュラムと教授学的診断(あるいは評価)についての考え方や方法の具体像を評価に焦点化して検討した。プレングルの構想するインクルーシブカリキュラム・授業・評価は以下のような特徴を持っていた。(1) 形成的評価が重要である。(2) 達成水準が多様に認められている。(3) 日々の評価を重視している。(4) 他者との比較ではなくて、個人としての評価(「その子なりにどの程度できたのか」)が重要である。(5) 授業形態としては、自由活動、プロジェクト活動、円形の対話などの活動が多く用いられる。(6) 義務的なカリキュラムにおいてはコンピテンシーラスターや学習発展モデルが用いられ、任意の自由なカリキュラムにおいては、それとともに、フリーテキスト、学習日記、音声資料・映像資料、ポートフォリオなど柔軟な評価手段が用いられる。

(3) アメリカのインクルーシブ教育の視点に立った評価の動向

アメリカのインクルーシブ教育の視点から評価について、多様な子どもの存在を想定した教室における評価のあり方を扱ったトムリンソン(Tomlinson, C. A.)とムーン(Moon, T. R.)を手がかりに検討した。トムリンソンとムーンの「一人ひとりをいかす評価」における評価観は、説明責任や点検のための評価とは異なり、子どもの学習に好奇心や気づきを促したり、自らの能力や可能性について確信させたりするような、学習者にとって有用な評価とならなければならない。そのために、一人ひとりをいかす評価では、次のことが重要となる。第一に、教師-子ども関係は共同学習者としての支援関係(パートナーシップ)であるという前提を、最初に教師と子どもとの間で共有すること。第二に、目標自体が子どもによって変わるというわけではなく、評価を行うために教師側が提示する諸条件を、学習者のパフォーマンスが最大化されるように柔軟に工夫すること。第三に、評価の対象は学習到達だけに限定されるべきではなく、子ども一人ひとりのレディネス・興味関心・学習履歴等も対象として加味すること。

(4) インクルーシブな学習集団づくりの評価指標(試案)

(1)~(3)をはじめ、これまでのインクルーシブ教育に関する授業・カリキュラム・評価づくりの立場から、「インクルーシブな学習集団づくりの評価指標(試案)」を仮説的に作成した。こんにちでは、学習集団内の子どもたちのニーズも多様になってきている。そうしたなか、評価の基準が画一化すると、その基準の枠組みに該当しない子どもが排除されてしまう。このように、評価の基準が子どもたちの多様性を許容しないものにしてはならない。そこで本試案では、「授業前-指導案づくりの視点」「授業中-指導と評価の一体化の視点」「授業後-授業改善の視点」の3つの視点から、教育目標に向かう子どもたちの成長を多様な形で見るとともに、実践をつくり出す手がかりになるよう作成した。

なお、本研究の成果として『インクルーシブ教育時代の多様なニーズのある学習集団における教育評価モデルの開発』(2019~2022年度科学研究費補助金 基盤研究(C)研究成果報告書、研究代表者 吉田茂孝、2023年3月)を刊行した。本研究成果の内容は、同報告書に依拠するものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 北川剛司	4. 巻 14
2. 論文標題 観点別評価の論点整理 「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の評価の実質化に向けて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 奈良教育大学教職大学院研究紀要 学校教育実践研究	6. 最初と最後の頁 81-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 北川剛司	4. 巻 13
2. 論文標題 G. Hughesのイプサティブ（ipsative）評価論に関する一考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 奈良教育大学教職大学院研究紀要 学校教育実践研究	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20636/00013408	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 樋口裕介	4. 巻 65
2. 論文標題 陶冶履歴研究（Bildungsgangforschung）における学習者の参加に関する考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中国四国教育学会編『教育学研究紀要』（CD-ROM版）	6. 最初と最後の頁 588-593
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 吉田茂孝
2. 発表標題 インクルーシブ教育時代の学習集団における教育評価のあり方
3. 学会等名 中国四国教育学会第74回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉田茂孝・樋口裕介・北川剛司
2. 発表標題 インクルーシブ教育における授業・カリキュラム・評価づくりの実践的課題
3. 学会等名 中国四国教育学会第73回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 北川剛司
2. 発表標題 グィネス・ヒューズ (Gwyneth Hughes) のイプサティブ評価 (ipsative assessment)
3. 学会等名 日本教育方法学会第56回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 吉田茂孝
2. 発表標題 インクルーシブ教育における授業集団の検討 - アクティブ・ラーニングに焦点をあてて -
3. 学会等名 中国四国教育学会第72回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 吉田茂孝
2. 発表標題 現代ドイツのインクルーシブ授業におけるグループでの学びに関する研究 - 戦後からのグループの特質の変遷を中心に -
3. 学会等名 中国四国教育学会第71回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 樋口裕介
2. 発表標題 陶冶履歴研究 (Bildungsgangforschung) における学習者の参加に関する考察
3. 学会等名 中国四国教育学会第71回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計13件

1. 著者名 早田雅彦・樋口裕介	4. 発行年 2023年
2. 出版社 溪水社	5. 総ページ数 19
3. 書名 「学校づくりと学習集団」深澤広明・吉田成章編『学習集団研究の現在Vol.4』	

1. 著者名 Takeshi Kitagawa	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Keisuisha	5. 総ページ数 10
3. 書名 Assessing children's learning. In: Takamasa Yuasa and Hideyasu Arai (eds.), Pedagogy of collaborative and inclusive learning in Japan	

1. 著者名 北川剛司	4. 発行年 2021年
2. 出版社 協同出版	5. 総ページ数 7
3. 書名 「隠れたカリキュラム (hidden curriculum) について説明せよ」「ブルーム理論とその後の教育目標・評価論の動向について説明せよ」「パフォーマンス評価について具体例を挙げながら説明せよ」樋口直宏・吉田成章編著『新・教職課程演習 第3巻 教育方法と技術・教育課程』	

1. 著者名 北川剛司	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 15
3. 書名 「スタンダード化時代の教育評価」湯浅恭正・福田敦志編著『子どもとつくる教育方法の展開』	

1. 著者名 Yusuke Higuchi	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Keisuisha	5. 総ページ数 16
3. 書名 Creating a curriculum that encourages children to learn. In: Takamasa Yuasa, Hideyasu Arai(eds.), Pedagogy of Cooperative and Inclusive Learning in Japan	

1. 著者名 樋口裕介	4. 発行年 2021年
2. 出版社 協同出版	5. 総ページ数 8
3. 書名 「発見学習に代表される「教育の現代化の特徴と課題を述べなさい」「教育課程とカリキュラムの概念的違いについて説明しなさい」「教育活動の計画・実施・評価に関わる営みを、カリキュラム・マネジメントとしてとらえることの意義と課題は何か?」「カリキュラム構成論としての「逆向き設計」論について説明しなさい」樋口直宏・吉田成章編著『新・教職課程演習 第3巻 教育方法と技術・教育課程』	

1. 著者名 樋口裕介	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 14
3. 書名 「カリキュラム・マネジメントと子どもに関われたカリキュラムづくり」湯浅恭正・福田敦志編著『子どもとつくる教育方法の展開』	

1. 著者名 Shigetaka Yoshida	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Keisuisha	5. 総ページ数 11
3. 書名 Teaching techniques that stimulate collaborative thinking. -Encouraging inquiry question and collaborative learning- In: Takamasa Yuasa and Hideyasu Arai(eds.), Pedagogy of Cooperative and Inclusive Learning in Japan	

1. 著者名 吉田茂孝	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 15
3. 書名 「アクティブ・ラーニング(AL)時代の学習集団づくり」湯浅恭正・福田敦志編著『子どもとつくる教育方法の展開』	

1. 著者名 北川剛司	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 3
3. 書名 「D13 質保証」「D14 アカウンタビリティレスポンスビリティ」「H7 プログラム学習」(西岡加名恵・石井英真編『教育評価重要用語事典』)	

1. 著者名 吉田茂孝	4. 発行年 2019年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 14
3. 書名 「学びの評価の教授学」(障害児の教授学研究会編『アクティブ・ラーニング時代の実践をひらく「障害児の教授学」』)	

1. 著者名 吉田茂孝	4. 発行年 2019年
2. 出版社 八千代出版	5. 総ページ数 16
3. 書名 「障害者権利条約批准後のインクルーシブ教育政策とインクルーシブ授業」(久田敏彦監修・ドイツ教授学研究会編『PISA後のドイツにおける学力向上政策と教育方法改革』)	

1. 著者名 高木啓・樋口裕介	4. 発行年 2019年
2. 出版社 八千代出版	5. 総ページ数 26
3. 書名 「コンピテンシーテストに基づく授業開発の方法」(久田敏彦監修・ドイツ教授学研究会編『PISA後のドイツにおける学力向上政策と教育方法改革』)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	樋口 裕介 (Higuchi Yusuke) (80587650)	福岡教育大学・教育学部・准教授 (17101)	
研究分担者	北川 剛司 (Kitagawa Takeshi) (80710441)	奈良教育大学・教職開発講座・准教授 (14601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------